

武田信吉と那珂市 —菅谷御殿と額田向山浄鑑院常福寺—

那珂市歴史民俗資料館

武田信吉

武田信吉は徳川家康の五男で天正 11 年（1583）遠州浜松生まれ、幼名は萬千代、母は家康の側室「於都摩の方」。「於都摩の方」は武田信玄の家臣秋山越前守虎康の娘。家康は、「武田」の名跡を惜しんで信吉に「武田」の姓を名乗らせた。旧家を大切にし、継承を重視する家康の姿勢に注目。

信吉は、天正 18 年（8 歳）下総小金城（3 万石）⇒ 下総佐倉城（5 万石）⇒ 慶長 7 年（1602）11 月（20 歳）に佐竹氏を秋田へ追った後の水戸城（15 万石）へ封じられた。

この時、佐竹氏が去った跡の水戸城二の丸屋敷が整わず、一時的に菅谷に「御殿」を設けて仮住まいした。なぜ菅谷かは定かではない。

しかし、翌慶長 8 年 9 月 11 日に水戸城で病死。死因は濕瘡（^{しっそう}疥癬）とされている。法名は「浄鑑院殿栄誉善香崇厳大居士」。

また、夫人は若狭小浜城主木下勝俊（豊臣秀吉の正夫人の弟木下家定の子）の娘、生母「於都摩」は天正 19 年 10 月 6 日下総小金で病死し、下総平賀（松戸市）の本土寺に埋葬。この墓は、後に荒れ果て古松のみとなる。これを見た秋山夫人の甥に当たる徳川光圀は、叔母の歿後 93 年目の貞享元年（1684）に新石碑（碑陰）を建立している。

浄鑑院常福寺

信吉供養のために水戸城下藤沢小路の善徳寺脇に、法名から採って「浄鑑院」を建立したが、後に初代藩主徳川頼房の命で心光寺と改号した（場所は備前町、天王町と称される）。その後、2 代藩主光圀が貞享 4 年（1687）に額田向山へ新寺地を決定し、元禄 2 年（1689）に心光寺を移し常照山浄鑑院と号した。宝永 6 年（1709）、3 代藩主徳川綱条が常福寺（瓜連）の寺蹟を額田向山へ移し浄鑑院と合併し、常照山浄鑑院常福寺と号した（常福寺（向山））。



（厨子入阿弥陀如来立像及両脇侍立像）常福寺（瓜連）所蔵

この浄鑑院（のちの常福寺（向山））の創建に当たって光圀は、水戸家伝来の宝物「極小阿弥陀三尊」像（上写真：台座に光圀の由来を刻記）を寄進している。伝来の背景は不明であるが、優れた像物である。



また、この寺は水戸藩主の位牌所として、京都の知恩院直末寺として広大な伽藍を持った学問僧修行の寺でもあった。しかし、幕末の天狗・諸生の騒乱で焼失してしまい、現在では境内地内に市立第二中学校が建っており、畑中の基壇に一部住職の墓石がわずかに残るのみである。なお、常福寺（向山）の宝物は寺蹟も含め、常福寺（瓜連）に戻っている。

菅谷村御殿

御殿は、信吉歿後は伊奈備前守忠次の陣屋とせられ、代官鈴木金太夫が住まいして新田開発に当たった。御殿の建物は湊村へ曳かれて湊御殿とされた。また、菅谷村御殿の跡には、光圀の代に「稗倉」が建てられた。この稗倉は、明治維新後に解体されたという。

なお、伊奈忠次は歿後後台村の源長寺（常福寺末、浄土宗）に埋葬されたが、この寺は天保期の社寺改革の際に廃寺とされた。

（高倉胤明著『田制考証』、小田辰之介『那珂郡沿革誌』）